「対話」に基づくワークシートプログラムの改善と実践について

（報告）

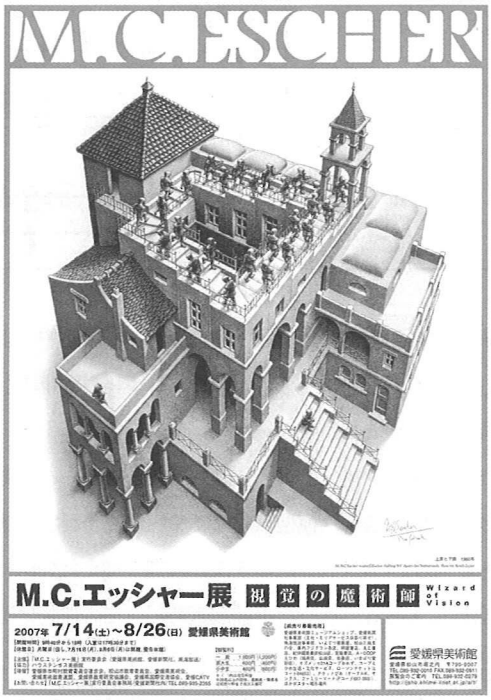
鈴木　有紀

1.　はじめに

愛媛県美術館では2005年度より毎年夏休みの企画展展示プログラムとして、『指令書』と呼ばれるワークシート状の鑑賞ツールを基に、利用者と作品ガイドスタッフ（ボランティア）が展示作品についての「対話」を通して、「みる」ことの面白さを伝えるためのプログラムを実践している。(1) 本プログラムはこれまでの報告でも述べてきたとおり、林原自然科学博物館で2003年から2006年の間実践された展示プログラム「恐竜博士への道」の考え方と、愛媛県美術館が2005年度より常設・企画の両展覧会の展示プログラムで取り入れている「対話型鑑賞法」の考え方がその基本となっている。そして、2006年度には、美術館として今後、本プログラムをより良いものにしていくためにも、実際のプログラム参加者の状況を把握し客観的な事業評価を行うことが必要と考え、平成18年度文化庁芸術拠点形成事業の一環として、外部展示評価専門スタッフによるプログラム評価（利用者調査）を実施し、結果、利用者の学びをサポートすることの可能な展示プログラムとして有効であるとの評価を得た。(2) しかし、同時に今後の取り組みについての新たな課題点も浮かび上がった。ここでは、2006年度の利用者調査から得られたプログラムの課題点を基に、翌年2007年度の夏に実施した『M.C.エッシャー展～視覚の魔術師～』展展示プログラム『たんけん！はっけん！エッシャー！！』について、その改善点と結果、そしてエッシャー展から学んだことについて報告を行いたい。

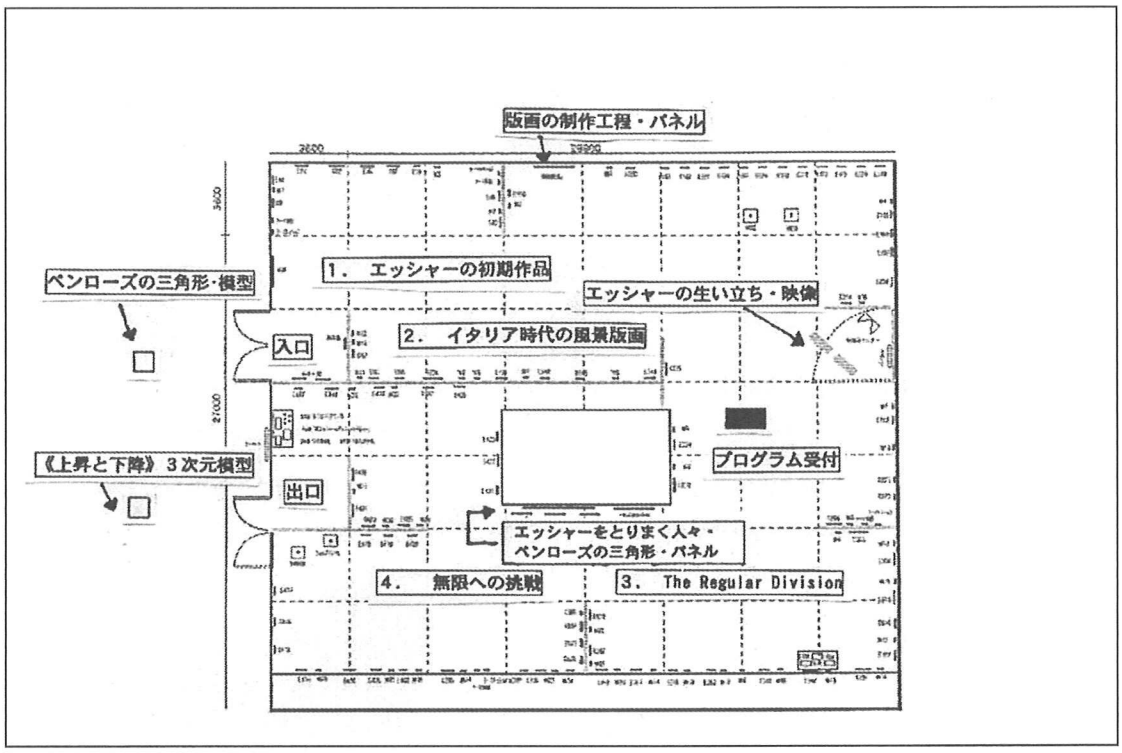
2.『M.C.エッシャー展』概要

まず、プログラムの基本となった展覧会について紹介する。『M.C.エッシャー展～視覚の魔術師～』は2007年7月14日（土）から8月26日（日）にかけて開催された長崎・ハウステンボス美術館の所蔵するエッシャー作品の紹介を行う企画展（巡回展）である。（資料1）作品の展示点数約80点。展示構成は“エッシャーその人の



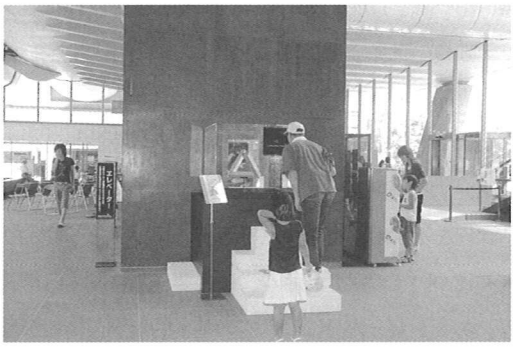
（資料1・展覧会ポスター）

人の生涯とその作品”という視点により時系列で第一章. エッシャーの初期作品、第二章. イタリア時代の風景版画、第三章.「The Regular Division」と呼ばれるエッシャー独自の世界、そして、第四章. 無限への挑戦を見せる代表的なエッシャー作品までの、計4部構成で展示された。また、展示室内にはその他にもエッシャーの生涯を紹介する映像コーナー、版画の制作工程及び作品の創造課程を示す解説パネル、そして、エッシャーゆかりの人々についての紹介パネル、各主要作品に関する解説文等、エッシャー作品についての基本的な周辺情報が配置された。（資料2）更に、展示会場の外ではあったが、今



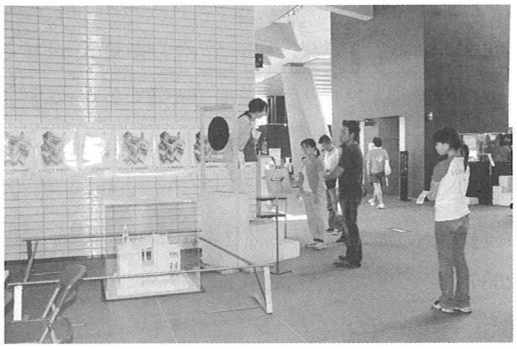
（資料２・展示図面）

回ハウステンボス美術館の許可を得て、作品中、よく使用される「ペンローズの三角形」の原理を表す模型（愛媛県総合科学博物館蔵・資料３）と展覧会ポスターに取り上げたエッシャーの代表作品《上昇と下降》を実際の３次元空間に表した模型（同じく愛媛県総合科学博物館蔵・資料４）を加えた。この３次元模型を加えた理由は展覧会前に来館者に行った事前調査時に、「この建物は実際どうなっているのでしょうか？普通に建てると、どんな感じになるのでしょうか」と、建物の構造についての興味から発せられる言葉が、特に男性（下は５歳くらいから上は40歳半ばくらいまで）を中心に素朴なものから専門的なものまで、多く聞かれたためである。



（資料３）

余談ではあるがこの《上昇と下降》の３次元模型を設置することについては館内で異議もあった。つまり、エッシャーの作品はいつまでも終わらない世界、どうなっているのか決着のつかないそのことこそが作品の特徴のひとつであり、３次元模型を設置することは来館者の興味の拡がりを削いでしまうのではないか、というもの



（資料４）

である。確かに、そのように考える来館者も存在するだろう。しかし事前の調査をふりかえる限り、多くの来館者が自然に抱いた「この建物は実際にはどんなものなのだろう？」という素朴な疑問と実際の情報（知識）の間を繋ぎたいという想いが筆者にはあった。そして例えその情報を知ったとしても、それは来館者のエッシャー作

品に対する興味を損うものでは決してなく、かえって作品に対する関心は増すのではないだろうかと考えた。作品を鑑賞する来館者も作品も決してその場限りの存在ではない。「学ぶ」ということは学び手の中で繰り返し再創造され続ける、終わりなきダイナミックな行為である。

3．2006年度の利用調査から得られたプログラムの課題点について

ここで、先に行われた利用者調査から得られた、この「対話」に基づくワークシートプログラムの課題点について述べる。2006年度に行った利用者調査では、「プログラムにおける、参加者の「学び」の実態を明らかにすること」と、「対話に基づくワークシートプログラムの有効性を探ること」、の２点を目的に調査を行った。調査方法としては、展覧会開催中の展示室内において、プログラム参加者に対する定点観測・会話採取、そして行動追跡調査、事後アンケートの４つの調査を中心に実施し、最終的にはプログラム担当者を含む調査員全員による議論のもとに質的な分析を行った。結果、浮かび上がって来たプログラムの課題については次のとおりである。

■「対話」に基づくワークシートを取り巻く課題

①「対話」が生まれる環境づくりの必要性

今回行った「会話採取」の調査の中で、最初から最後まで（指令の内容に対して）「わからん」を連発する子がいた。（「対話」を促進する役目の）ボランティアスタッフや同行した保護者のどんな問いかけ、働きかけに対しても「わからん」で答え。結局ボランティアスタッフは、少しの知識を一方的に伝えることしかできなかった。これでは「対話」が成立しているとは言えない。しかし、これは全くの例外として片付けることはできない。プログラム参加者の思考が広がり深まるような「対話」が成立することは、実は、本当に貴重な瞬間とも言えよう。まずは「対話」が生まれるような雰囲気づくり、働きかけの更なる検討が必要となる。

②　スタッフの「対話」スキル向上とそれらをサポートする体制の整備

「会話採取」において、ボランティアスタッフの参加者への話しかけ方や「対話」の終わらせ方の観察記録、事後の郵送アンケートの回答からも、各スタッフの対話スキルによって、参加者の学びの拡がりや深度にかなりの影響を与えていることが伺われた。上手く言葉で（作品について考えたことを）表現できない参加者に対する対応や参加者の言葉の勝手な解釈、情報の一方的な伝達、逆に何も伝えないまま終わってしまうような場面も見られた。

スタッフは参加者の思考が上手く展開するように、例えるならば、止まっているボールを少し指を押して勢いをつけるような、または、締め切った部屋の閉ざされた窓を少しだけ開けて外の空気を入れるような、たまって淀んだ水に新しい水を導き流れ行く方向を作り出すように、新しい力を生み出す力を持っているものに少しの手助けをして、可能性を引き出す手助けをするような存在といえよう。これは、とても高度なスキルが要求されるが、直接参加者に接するスタッフだからこその常なるスキルアップと、それをバックアップするようなシステムが重要である。

③　「開かれた質問」の“質”の検討

事後郵送アンケートの回答の中に、指令書の設問が抽象的で子どもには難しすぎたと言う保護者の意見があった。この意見は（決められた一つの答えを回答することに慣れてしまっている大人の）「開かれた問いかけ」に対する大人の戸惑いと見ることができる。しかし、同時に、「開かれた問いかけ」を考えていく際の課題ともみなすことができる。確かに回答が一つに限定されていないということは、一見どんな答えでも認められるということになるように思われる。しかし「どんな考え方をしてもいい」ということと「どうでもいい」ということは異なる。様々なアプローチや拡がっていく方向性が認められるような、真の意味での「開かれた問いかけ」の吟味が課題となる。そのためには、まず美術館側の用意するメッセージやプログラムのねらいも、きち

んと吟味されなければならない。「開かれた問いかけ」だから、抽象的な問いであるということではなく、「開かれていて」かつプログラムのねらいにつながるような「具体的な」問いかけを目指さなければいけない。また、同時に参加する子どもに同行する保護者にも、一般的な教育の在り方とは異なる博物館での学びのあり方について、積極的に働きかけ、理解をしてもらうようにしていくことも重要である。

４．展示プログラム『たんけん！はっけん！エッシャー！！』の改善点と内容

以上、これら３点が調査結果を経て、次回に向けて検討していくこととなったプログラムの課題点である。今回のプログラム開発では、昨年度よりもよりプログラムの質をあげるため、これら課題点を念頭におき、本番当日に向けて準備を行っていくことになった。

プログラムの開発ではまず、今回のエッシャー展を来館者にどうみてもらいたいか、我々スタッフは来館者に対しどのようなサポートが出来るのかについて、その拠りどころとなる、来館者への事前調査から始めた。

（１）　事前の来館者の反応について

マウリッツ・コルネリス・エッシャー(1898-1972)は、その独自の世界から各地の博物館で「だまし絵」や「錯視」、「デザイン」「建築」等様々な切り口で展覧会が開催され、内外を問わず人気を博すオランダを代表する版画家である。調査は、館内でエッシャー展の予告ポスターに目を留めていた幼稚園児の親子連れ（３組）小学生の親子連れ（２組)、中学生どうしのグループ（男女ともそれぞれ２組)、３０代から４０代くらいの男性４名、同じく女性２名、そして当館ボランティアスタッフを含む６０代以上の男女２０名以上から、ポスター掲載作品を一緒に眺めながらエッシャー作品へのイメージを中心に来館者からの反応を聴いていった。

そこでわかってきたことは、一般的に“エッシャー”と聞いてイメージする展覧会とは、「だまし絵」等に代表される不思議な作品とその面白さを伝えることをテーマとした子ども対象（特に小学生）の展覧会、といったイメージがとても多いということだった。そのため今回展示される初期作品やイタリア時代の風景版画についてはあまり知らない（みたことがない）来館者が多く、かえって新鮮にみえることもわかってきた。また当初、エッシャーについては誰もが知っている、親しみのある作家であるという前提で調査を進めていたが、途中、６０代以上の来館者から余程詳しい人を除いて、「エッシャーは初めて」という声が多くきかれることがわかってきた。（６０代以上の調査人数が多いのはこのためである）この声を受けて、実際にエッシャーの図版が教科書に登場した時期を調べてみるとここ３０年程のことであることがわかってきた。

このことから今回の展示構成を見てみると、エッシャーについて「だまし絵」のイメージが強い来館者には初期の作品と出会うことでエッシャーとその作品に対する新しい発見を、また初めての来館者には、「だまし絵」に代表される後期の作品と、文字通り初めて出会うことでエッシャー作品の魅力の一端に触れてもらえることができるのではないかと考えた。そして今回のプログラムは、エッシャーを知っている人も初めての人も、それぞれの視点で作品を楽しむことができる内容であることが望ましく、それが可能となる指令内容（発問内容）の検討と、来館者の作品に対する考えを自然に引き出すことのできる環境づくりを考えていくことになった。

（２）　プログラム内容と改善

(2)-1 プログラムの目的

まず昨年度と同様、本プログラムの目的とスタッフの役割について、次のように設定を行った。

①　プログラムの目的

参加者の「みる」力を養い、プログラム体験後も参加者自身が自分の目や感情で作品を素直に楽しむことができるような、参加者が主体となった「学び」の場をつくる。

②　プログラムでのスタッフの役割

本プログラムでのスタッフの役割は、作品にまつわる情報について参加者に「教える」ことが中心のテ

ィーチャーではなく、参加者自らが作品をみて考えたことを中心にして、参加者自身の考えを「引き出し」、その場に応じて参加者に作品の情報を提供するファシリテーターとする。

（2）—2　指令内容について

次に今回の指令内容（発問内容）についての検討を行った。毎回同様の作業であるが、当館では指令作成時には、展覧会チーム内で展覧会担当学芸員と教育普及担当学芸員が相談しながら、指令作成を進めていく。その際、主に考慮するのが、事前の来館者の様子と展示内容、そして展覧会担当者がその展示をどうみて欲しいかという考えである。

今回もエッシャー展担当であった西田とともに上に述べた事項について検討しながら、指令内容を作成していった。その際、判断材料とした西田の考え、及び今回の展覧会の企画元であるハウステンボス美術館の企画意図が次の３つである。

①　担当者の考え（担当：西田学芸員の言葉より）

「エッシャーは面白いけれど、みればみるほど難しくて、本当に迷宮に入っていくみたいになる。でもそういう想いは作品とじっくり向き合うことから始まるのだと思う。だから、この展覧会ではまずは作品と丁寧に向き合うこと、エッシャーの作品は面白いという入口づくりから始めたいと思う」

②　エッシャー自身の言葉（展覧会パネルより）

「私は、私の作品をみてくれる人々の心に驚きを呼び起こそうとしているのです」

③ハウステンボス美術館より（展覧会企画意図）

「エッシャーの不思議な作品から人柄を想像すると、クールで知的な人間嫌いではないかと思われるかもしれません。しかし、たとえ幾何学的パターンの版画を制作する時でも、彼がモチーフとしたのは、風景、動植物といった自然の形態でした。今までエッシャーは、トリッキーなだまし絵の作家という印象だけが強調されがちでしたが、これを機会に、彼自身の互換や体感を基に自然の物から出発した豊かな洞察力、想像力、そして幅広い人間性をご認識いただけると思います」

このような理由から、今回の指令内容については、①美術館があらかじめ指定した、エッシャー作品に共通するエッセンス（「変容」「循環」「無限」「多面体」「緻密な観察」等）を含む７作品の中からひとつを選び、その感想を述べるものと、②展示作品全体の中から自分が「びっくり」した作品をひとつ選び、驚いた理由を述べるもの、そして、③同じく展示全体を見た上でエッシャーという人物について想像をめぐらせるもの、という３つの発問で実施していくことになった。（資料５）

（資料５・指令内容と表紙）

（2）－3　プログラム環境への工夫—受付場所の変更

また今回は、これまで展示室外で行っていた参加受付の場所を、昨年度からプログラムの作成に際し、指導・助言を頂いている林原自然科学博物館　展示普及部エデュケーター・井島真知氏の「展示プログラムは展示の“イ

ベント”ではなく、展示の“オプション”である」という助言を基に、展示室内の中央付近に移動するという変更を行った。（資料２展示図面、資料６参照）これは、エッシャー展を訪れた来館者に対し、美術館（展示室）の雰囲気に慣れる（心の緊張を解きほぐす）時間の余裕を作るためと、展示の流れの中で、来館者に無理のない、自然な形でのプログラムへの参加を促すためである。

（資料６・展示室内に設置した受付場所）

（２）－４　スタッフのスキルアップについて

そして最後に、昨年度の反省もふまえた上で、今回プログラムに関わるスタッフ全員で、まずはプログラム目的の共有と、エッシャー展についての研修、指令内容についての研修を行っていった。研修では、当たり前ではあるが、参加者がスタッフに話しかけやすい雰囲気づくり、（あいさつや態度等）また、スタッフは参加者の考えの正解、不正解を判断するためにいるのではないという考えを中心にどんな風に参加者と「対話」していくのか、スタッフがふだんから関わっている対話型鑑賞法によるギャラリートークでの経験をベースにスタッフ間で意見を出し合って行った。

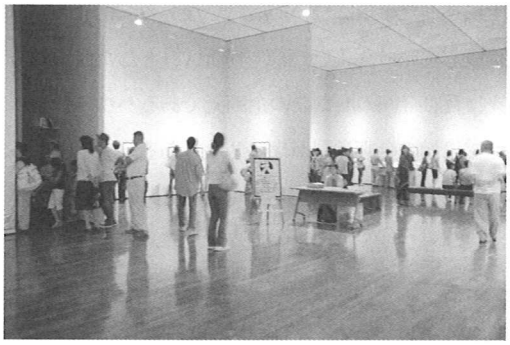
また、今回のプログラムの開催は展覧会がオープンしてから２週間後と実施開始までに時間的な余裕があったため（今回のプログラムは８月４日、５日、11日、12日、18日、19日の６日間実施された）、ほぼ全員のスタッフが事前に展示室を訪れ、展示空間の雰囲気、展示作品の場所、そして実際の来館者の様子や来館者どうしが作品の前で交わしている言葉の聞き取り等、プログラム開催に向けて準備を整えて行った。

５．結果とふりかえり

（１）プログラム概観

６日間のプログラム参加人数はそれぞれ①170(10)、②230(30)、③200(50)、④202(50)、⑤231(70)、⑥252(70)、（()内は途中棄権人数）、と展覧会の来館者数（総来館者数は30,886）に比例して多くの参加を得た。（資料７）

また参加者の展示室平均滞留時間は１時間から１時間半と、プログラムに参加しなかった来館者と比べると２倍程度長く、ついでプログラム終了後実施した、来館一週間後の事後調査からも、エッシャーの作品と向き合った経験がその後、様々な形で発展・継続していく様子が見て取れ（資料８）、昨年度同様、この「対話」を基本としたワークシートプログラムが、来館者が作品と向き合うためのひとつの手段となることがわかった。



（資料７・展示室内の様子）

（２）改善箇所の様子

①参加者の様子

そして先の来館者調査を経て改善を行った各箇所の様子であるが、特に顕著な違いを見せたのが場所の変更を行った「受付」での参加者の様子と、展示室内のスタッフの「対話」に取り組む姿勢であった。

先にも述べたが昨年度の取り組みでは、プログラムの参加受付場所は展示室の外にあり、したがってプログラムの開催を知らない来館者に対しては、スタッフの方から積極的に参加を働きかけるという形をとっていた。また、美術館というふだんとは異なる環境に入ってくる来館者への配慮もなく、展示室に入るとすぐにスタートしていた昨年のプログラムは、指令内容（発問の言葉）自体の問題も重なって、参加者に心理的なとまどいや緊張感を産んでしまった。

このような経験から、今回は受付箇所を来館者が展示空間に慣れ始めると思われる、展示室の中央部分に位置し、更に、参加の有無についてはほぼ来館者の意志に任せた。

結果は、昨年度に反して予想以上の参加者からの積極的な参加表明を得ることとなった。（資料９）もちろん、全ての来館者がそうであったわけではない。しかしこれは、美術館を訪れ、展示空間にもそろそろ目も心も慣れ始めた来館者の状態に対して、展示の流れにそった形で配置された今回のプログラムが自然に受け止められたことを表しているのではないだろうか。

（資料９・　受付の様子（３枚とも））

③　スタッフの様子

また、エッシャー展はスタッフのモチベーションが非常に上がった展覧会となった。プログラムは途中で棄権した参加者もあったが、エッシャー作品に刺激された参加者との「対話」の拡がりが、スタッフを更にを刺激し、通常、受付班・対話班・修了証受渡班と３つの持ち場を交代で運営するプログラム体制になっているのにもかかわらず、対話班担当になったスタッフが、参加者との対話が「面白い」という理由で、なかなか展示室から戻らず、対話班を交代することを惜しむというような事態がおこった。そして昨年の課題点にもあった、スタッフ個々人の対話スキルには依然個人差が見られたが、結果として多くの参加者との様々な「対話」の実践（失敗と成功を繰り返すこと）が、少しずつスタッフのスキルアップにつながっていった。

このスタッフの対話スキル向上については、今後も、ふだんの常設展示室でのギャラリートークや、その他の企画展トーク等の実践を中心に、継続的で、できる限り細やかなバックアップが出来るよう取り組んでいきたい。

（資料１０・プログラムの様子（３枚とも））

④　指令書の内容

そして、昨年度のプログラムでは途中、数回の改訂を行った指令内容であるが、今回は次のような内容（発問の言葉）でプログラムを実施した。

指令１：この展示室の中にこんな印→（※資料５参照）がついている絵が、全部で７つあります。その中からあなたが気になる絵をひとつ選んで、どうして気になったのか教えて！

指令２：この展示室の中であなたがびっくり！！した絵をひとつ選んで、どうしてびっくりしたのか教えて！

指令３；この展示室の中の絵は、ぜんぶ、エッシャーさんという人が作った絵です。エッシャーさんてどんな人だと思う？展示を見て想像して、あなたの自由な考えを聴かせて！

前回の『浮世絵展』では、プログラム開催中、参加者の様子を観察しながら指令の改訂を４回行った。理由は、発問のひとつが「開かれた質問」を心がけたにもかかわらず、実際には「閉じられた質問」となってしまったためである。具体的には前、歌舞伎役者を描いた作品を使用し「この人ってどんな人だと思う？」という問いかけから、参加者の自由な考えを引き出したいという想いがあったのであるが、質問が漠然としすぎたこと、また、展示空間上の心理的な緊張感も手伝って、参加者の半数をとまどわせる結果となってしまった。そして今年度の指令では、前年度の失敗と似た表現を使わなければならない“指令３”の存在があった。

このような理由から、今回の指令３の表現についてはプログラムの目的と昨年の反省点の双方を考慮した上で言葉の表現に注意を払い、再びプログラム実施中に参加者がとまどいを見せた時には、今回も途中から改訂を行う心構えで臨んだ。しかし、プログラムは一度も改訂を行うことなく進んでいった。一番心配した指令３の問いかけからは、参加者それぞれが展示をみて考えた、エッシャーその人についてのイメージが拡がっていったのである。

（３）　展示プログラムの位置づけと展示内容（キュレイション）の大切さ

最後に、プログラム開催中の来館者の様子、そして展覧会終了後に参加者や一般の来館者（プログラムには参加していない来館者）から寄せられたアンケートや話等から学んだことを述べてまとめとしたい。

先にも述べたが、愛媛県美術館で2005年度から始まった、この「対話」に基づくワークシートプログラムは、“参加者の「みる」力を養い、プログラム体験後も参加者自身が自分の目や感情で作品を素直に楽しむことができるような、参加者が主体となった「学び」の場をつくる”ことを目的としている。そして、2006年度の調査では来館者が主体となる展示プログラムのひとつとして有効であるとの評価も得た。しかし、筆者は今回のエッシャー展の来館者の様子を観察しながら、途中から、「この展示に展示プログラムは必要ないのではないか？そもそ

も展示プログラムとは？」という想いを抱き始めていた。何故ならば、エッシャー展を訪れた来館者はプログラムに参加せずとも、その人ぞれぞれの意識・関心の流れにそって、展示を読み解き、その後も継続的に「学んで」いたからである。

展覧会終了後、しばらく経ってからスタッフのひとりから、プログラムに参加していたある男の子（当時幼稚園年長組）の話を聴かされた。その男の子はスタッフの開催するアトリエ教室の幼児で、これまでアトリエでは「工作」を中心に活動していたが、今回、エッシャーの作品をみて以来、(それまでにも描くことには興味を持っていたが)「絵」を描くことに俄然、関心を示すようになったというものである。(資料１１）この男の子の展覧会での様子については保護者からも次のような声が寄せられたのでここで紹介したい。

「Ｓ（スタッフの名前）先生へ
おはようございます。お世話になります。Ｔ（子どもの名前）が、エッシャー展から帰ってからすぐに描いた絵と次の日に描いたものです。美術館では、はじめは先生を探していて、さらっと絵をみた感じでした。（エッシャーの）自画像のところに来た時に、「これ、絵？」と聞いてきたので、「絵よ」と答えると、かなり驚いて感動していました。指令書をもらって、気に入った絵は、スプーンとフォークのアートのようなものでした。不思議だったと思う絵は《上昇と下降》で、この絵は建物が気に入ったと言っていました。帰りにがちゃがちゃをして、出てきた（エッシャー作品の）魚のオブジェをとても気に入って、家に帰ってこの絵を一番に描いていました。そして、この絵を描いた後、しばらく何もしゃべらないで、もくもくと何枚も絵を描いていたんですよ。出来上がった絵をみてびっくりしました。この時の絵の影響なのか、最近、かなり絵を描くし、写生することが多くなりました。今は、似顔絵にちょっとはまっているようです」

この男の子は展覧会から２年経った 2009 年現在も、絵を描くことを続けており、またエッシャー展以来、作品鑑賞に興味を持ち、度々美術館の展覧会を訪れていると聴く。また、その他にもプログラムに参加しているわが子の姿をみつつも、自身もじっくりと展覧会を楽しんでいた保護者からも、「一つ一つの絵に詳しい説明があったのでとても興味深く鑑賞しました。帰宅後、“多面体”についてインターネットで調べました。美術館から数学につながり、とても満足のいく美術展でした」といった声が寄せられ、それぞれが（プログラムに参加せずとも）自分の目や感情で作品を楽しみ、美術館での経験がその後も「続いて」いることがわかってきたのである。

愛媛県美術館で行われる教育普及活動で、事業実施後、参加者に「学び」が起こっているかいないかを判断する視点のひとつに「継続性」がある。これは参加者の美術館での経験が、その後も来館者自身の生活の中でつながるものであったかどうかということである。もちろん、今回プログラムに参加したことがきっかけとなり、その後の参加者の学びにつながっていった例も確認しており、展示プログラムそのもの自体を否定するわけではない。にもかかわらず、このエッシャー展では（プログラムの参加者ではない）多くの来館者が、展示室内でひとつの作品を繰り返し観察し、感動の声を上げ、一緒に来館していた同伴者、もしくは偶然会場に居合わせた、恐らくは一度も面識のない他の来館者とその感動を共有し、その後も「学び」がつながっていく様子を美術館の内外でよく聴いた。そしてこれはひとえに、今回の「エッシャー展」の展示が「良い」展示だったためではないかと筆者は考えた。

「良い」展示とは作品のみならず、実際に展覧会にやって来る来館者の状態（心理的なものを含む）も組み込まれている展示であり、それは作品の配置、動線、解説文の内容や長さまで、展示構成全体に及ぶ。そういった来館者を想定した展示内容（キュレイション）は、来館者の知的好奇心を刺激し、「学び」の質を向上させることができるのではないだろうか。

そのような意味で今回のエッシャー展は、例えば作品の配置は時系列というオーソドクスな手法ながら、来館者にとって、何故この作品がここに選ばれて展示されているのかという作品相互の関連付けが可能であった。

そして展示動線は一度見たら後戻りが不可能となるような一方通行的なものではなく、来館者それぞれの興味に応じて、気になる作品の間を行きつ戻りつしながら作品についてじっくりと考えることができる余裕を持っており、かつ来館者が展示室の雰囲気に目も心も慣れ始める頃には、来館者自身が展示室の中心となって、みたい作品の場所を自分で選択できる空間になっていた。

また、作品そのものの面白さはいうまでもないが、解説文や版画の制作工程、数学の原理等を解説するパネルの内容、エッシャーの生い立ちを紹介する映像も、多くの来館者が作品を見た時に素朴に感じるであろう驚きや疑問に十分に応えることのできるバランスのとれた内容のものが配置されていた。そしてところどころで専門的な情報を盛り込みながら、来館者に作品についてさらに考えるきっかけを提供し、つまりはちょっとだけ来館者にチャレンジする内容になっていた。そして、これが最大の要因であると思われるが、①この展示空間と②来館者とのバランスのとれた作品及び作品についての情報提供の配置という２つの要素の調和が、来館者が作品について考えるための環境を整え、そのことが自然に来館者の思考を拡げていったと思われる。

ここで、先に筆者が抱いた「展示プログラムの必要性と位置づけ」に対する疑問に戻ると、筆者が今回のエッシャー展から得た「学び」は、極端に述べるならば、究極の「良い」展示には展示プログラムは不要であるということである。もちろん、曖昧な目的を掲げる中途半端なプログラムならばそれは来館者の「学び」を妨げることにほかならず、そのようなプログラムは実施しない方が良い。しかし、「良い」展示には、展示プログラムの質を上げ、「対話」を行うスタッフのスキルを向上させ、プログラムに携わるスタッフ全員にとっての「学び」を提供してくれる力があることも、また事実である。

そのため、プログラムを開発する教育普及担当学芸員には、来館者や教育普及活動のバックボーンとなる教育理論（哲学）についての積極的かつ冷静な視点が求められる。そして林原自然科学博物館の井島真知氏の助言のとおり、展示プログラムは「来館者にとって展示の“イベント（一大事）”ではなく、“オプション（選択可能なもの）”」である。展示プログラムは決して展示の、もっといえば展示をみている来館者の心の「流れ」から切り離されてはならず、また“オプション”であるからには、それを展示に「付ける」か否かの選択は参加者が行う。開催される展覧会はオプションを付けても付けていなくても「みる」ことを楽しめる展示でありたい。

これまで筆者は、展覧会担当者と協働でプログラムの開発をしつつも、展示内容と展示プログラムの関係についてはあまり深く探ってこなかった。しかし今後は、来館者と博物館（Museum）での教育のあり方について考えるとともに、それらの基本となる展示内容（キュレイション）のあり方についても、探っていきたいと思う。

註

（1）拙稿「利用者との対話を主とする新しいワークシートの試み　聖徳太子と国宝法隆寺展家族プログラム・たんけん！はっけん！法隆寺！！の取り組みから（報告）」『愛媛県美術館研究紀要』第５号(2006、愛媛県美術館)

（2）ワークシート開発委員会編『平成18年度文化庁芸術拠点形成事業　博物館教育シンポジウム　ともに見る、ともに学ぶ　利用者との対話からはじまるプログラム～ワークシートを中心に～（報告書）』(2007、愛媛県美術館)

参考文献

井島真知「ミュージアムエデュケーターとして考える教育と展示」日本展示学会誌『展示学』第28号（1999、日本展示学会）pp.64-70

久保田賢一『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』(2000、関西大学出版部)

久保田賢一「構成主義が投げかける新しい教育」CIEC会誌『コンピューター＆エデュケーション』第15巻（2003、コンピュータ利用教育協議会）

謝辞　『M.Cエッシャー展～視覚の魔術師～』の開催・運営に際し、指導・助言頂いたハウステンボス美術館の皆様、エッシャー作品の３次元資料について快く展覧会への貸出を承諾頂いた愛媛県総合科学博物館学芸員の久松洋二氏、今回も展示プログラム運営に関して指導・助言頂いた、林原自然科学博物館の井島真知氏、ならびにその後の参加者の姿について教えて頂いた、当館作品ガイドスタッフの白石弘美氏、作品を貸して頂いた村上大樹氏、保護者の村上祥子氏、そして今回も事後アンケート等、プログラム評価に協力して頂いた多くの参加者のみなさまに対し、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

資料８（プログラム参加一週間後に実施した郵送アンケート調査資料）

８月１９日（日）の参加者１１０名に対し調査協力をお願いし、その後６０名から回答を得た（回答率５５％）

愛媛県美術館「M.C.エッシャー展～視覚の魔術師～」関連事業
展示プログラム
『たんけん！はっけん！エッシャー！！』ご参加の皆様へ

この度は、『たんけん！はっけん！エッシャー！！』にご参加いただき、ありがとうございました。
愛媛県美術館では、今後も展示プログラムに改良を重ね、もっともっと皆さんに楽しんでいただきたいと考えております。

つきましては、お手数をおかけしますが、同封のアンケートにご協力いただきたくお願い申し上げます。

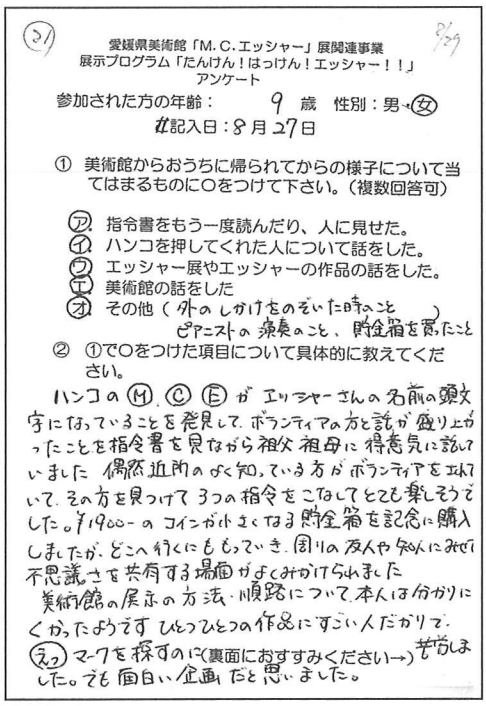
小学生の方は親御さんから見たお子さんのご様子を親御さんに記入していただき、中学生以上の方は自分の感想をご自身で記入してください。できるだけ具体的にありのままをご回答いただけると大変参考になります。
また、ご回答いただきました内容は、美術館においての教育普及活動の目的以外には使用いたしません。

なお、お手数ですがご回答頂いたアンケートを**9月2日（日）**までに、同封した返信用はがきでご投函下さいますようお願い申し上げます。

★お礼の気持ちを込めて、「エッシャー展」の絵葉書を一枚プレゼントします。あなたの大切なご意見を楽しみにお待ちしております。
今後ともよろしくお願い申し上げます。

平成19年8月24日
愛媛県美術館
学芸課普及係

① 事後調査協力のお願い

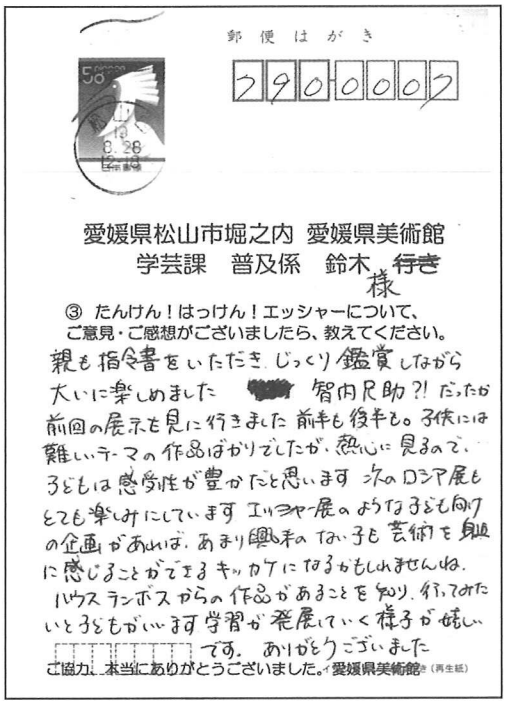

(21)
愛媛県美術館「M.C.エッシャー」展関連事業
展示プログラム「たんけん！はっけん！エッシャー！！」
アンケート
参加された方の年齢：　9　歳　性別：男・(女)
記入日：8月27日

① 美術館からおうちに帰られてからの様子について当てはまるものに○をつけて下さい。（複数回答可）

(ア) 指令書をもう一度読んだり、人に見せた。
(イ) ハンコを押してくれた人について話をした。
(ウ) エッシャー展やエッシャーの作品の話をした。
(エ) 美術館の話をした
(オ) その他（外のしかけをのぞいた時のこと　ピアニストの演奏のこと、貯金箱を買ったこと）

② ①で○をつけた項目について具体的に教えてください。

ハンコの(M)(C)(E)がエッシャーさんの名前の頭文字になっていることを発見して、ボランティアの方と話が盛り上がったことを指令書を見ながら祖父祖母に得意気に話していました。偶然近所のよく知っている方がボランティアをされていて、その方を見つけて3つの指令をこなしてとても楽しそうでした。¥1900-のコインが小さくなる貯金箱を記念に購入しましたが、どこへ行くにももっていき、周りの友人や知人にみせて不思議さを共有する場面がよくみかけられました。
美術館の展示の方法・順路について本人は分かりにくかったようです。ひとつひとつの作品にすごい人だかりで、(えっ)マークを探すのに(裏面におすすめください→)苦労しました。でも面白い企画だと思いました。


郵便はがき
790-0002
愛媛県松山市堀之内　愛媛県美術館
学芸課　普及係　鈴木　様　~~行き~~

③ たんけん！はっけん！エッシャーについて、ご意見・ご感想がございましたら、教えてください。

親も指令書をいただき、じっくり鑑賞しながら大いに楽しめました。[redacted]智内尺助?!だったが前回の展示を見に行きました。前半も後半も。子供には難しいテーマの作品ばかりでしたが、熱心に見るので、子どもは感受性が豊かだと思います。次のロシア展もとても楽しみにしています。エッシャー展のような子ども向けの企画があれば、あまり興味のない子も芸術を身近に感じることができるキッカケになるかもしれませんね。
ハウスランボスからの作品があることを知り、行ってみたいと子どもがいます。学習が発展していく様子が嬉しい[redacted]です。ありがとうございました。
ご協力、本当にありがとうございました。愛媛県美術館（再生紙）

② アンケートの内容　（表・裏）

事後郵送アンケート結果一覧

参加者		①来館後の行動					②行動の内容	③意見・感想
年齢	性別	ア．指令書読む	イ．スタッフの話	ウ．エッシャー展や作品の話	エ．美術館の話	オ．その他		
5，6	男、女	○	○	○			年中（男の子）小１（女の子）の子供２人を連れての参加で、ゆっくり鑑賞できるか不安でしたが、スペースが広いこと、お話してもいいこと（ハンコをもらうために）など、すごく良かったです。子供たちも家に帰ってからパパに指令書を見せ、おじさんにこんな話をした、こんな絵があったと感想を話していました。またこんな風に、子供たちが楽しみながら参加できる機会があればぜひぜひ参加したいです!!	ボランティアの方々、子供達が話しやすい状況を作って、話しかけて下さり、ありがとうございました。内弁慶の下の男の子が話ができたのが、びっくりでした！
7，9	？？	○	○	○			・7才の子はその日の日記に自分がいちばんすごいと感じた絵のことを書いていました。 ・指令書をもらって、こうすると、こんなことをして（ハンコを押してくれる）ということを祖母に詳しく説明していました。ただ１人で見ただけでなく“人とかかわれた”ことが楽しさを増した様子でした。	一つ一つの絵に詳しい説明があったのでとても興味深く鑑賞しました。帰宅後、“多面体”についてインターネットで調べました。美術館から数学につながり、とても満足のいく美術展でした。
11	女			○			どの作品が一番好きだったか話し合った。	いつも美術館に行くと、子どもたちに気付いてほしいことのヒントを与えたり、感想を聞いたりしていました。今回はスタッフの方が子どもたちと話してくださってとてもよかったです。
9	女	○		○	○		エッシャーの絵ハガキを購入しました。思っていた以上に興味をそそられたようで帰ってきてからも、親子、家族でエッシャーの作品について「ここがすごかった。」「あの作品がよかった。」など話をしました。会場内にいたTシャツを喜た方が気に入った作品を聞いて下さったことも、子どもはとてもうれしかったようです。	子どもが行きたがったものの、本当に楽しめるのかとても不安でしたが、親子で感動、感激できるもので見に行ってよかったです。人の多さにびっくりしました。子どもは絵ハガキを買うほどはまったようです。修了証ももらい、大満足でした。（壁の）解説が子どもには難しかったのですが、係の方が説明して下さったので、よくわかったようです。親は解説を読んでよくわかりよかったです。
12	女	○		○			エッシャーの有名な作品の「滝」について親と話したり、不思議だった作品の話をしたりしました。他にも数多くの不思議な作品を描いたエッシャーはすごいなあと話をしました。	エッシャーの作品には、とても驚かされました。私には、思いつけないような作品ばかりでとても楽しかったし、今度絵をかく時の参考になりました。また、このような機会があったら、親といっしょに今度は行きたいです。※絵葉書、ありがとうございました。良い思いでになり、うれしかったです。
14	女	○		○			ア.親に見せました。指令書は今も大事に保かんしています。 ウ.自分が好きな絵のことについて妹とはなしをしました。そして不思議なことも妹と話しました。	１枚１枚の絵に、ほんとに見どころがいっぱいで、いつまでもながめたくなるような作品でした。
12	女	○	○	○	○		家に帰って親に美術館であったことやエッシャーさんの絵をみたときの感想がたくさん言えました。あのままふつうに絵を見て帰っていたらはにも感じなかっただろうと思います。本当にありがとうございました!	すごくいい展覧会だと思います。みなさんのような方がもっといたら、いろんな人にエッシャーさんのことを広められると思いますまた機会があれば美術館に足を運びたいと思っています。By長野愛美
15	男、女		○	○			エッシャーの初めのころの作品も多く、とても楽しかった。話をきいてくれた方は私の話や選んだ絵について詳しく説明してくれてうれしかった。	エッシャーの代表作を見れてうれしかった。初期の頃は普通の絵も描いていたと知っておどろきました。エッシャーの生い立ちや版画についての説明もあってわかりやすかったです。
7,10	男、女			○	○		4人で美術館に行って父のみが他の展示物を見に行っていたので父にエッシャーの作品の内容･･･目が怖かったとかこんなに見えたんよとかと言って聞かせていました。低学年には少し難しいと思っていましたが説明して下さったので興味がより持ててよかったと思いました。ありがとうございました。	
15	女	○		○		ハンコを押してくれた人にどんな話をしたのか話した。	ア＝指令書を読んで美術館のことを思い出し、学校で出していた宿題、「実際に美術館に行って作品を見て、それをレポートにする」作業の参考にした。 ウ＝「エッシャーの作品、酔いそうになるのがあった」という話などをした。 オ＝主に指令３のことについて話した。「作品を見てきて、エッシャーは想像力が豊かで、ユニークで、謎が好きで、イタズラ好きで、ちょっぴりイジワルなんだ。」という話をしたことについて話した。	「たんけん!」っていうぐらいなんだから、もっとたんけん!!って雰囲気があればいいかなと思った。･･･迷路的な【ムリ言うなって話ですよね（笑）】
10	男			○			エッシャーの作品について話してくれた。図録を購入していたのでその本見ながら興味のある作品について教えてくれた。	
11	女			○			パンフレットを見て、のっている絵について話した。指令書で選んだ絵についてもう１度話し合った。	見るだけでは、自分の感覚でとらえているだけなので、気に入った1枚だけでも詳しく聞ける機会があればよかったです。
9	女	○		○			家族やばあちゃんにどんな絵があったとか指令書が難しかったけど面白かったと話していました。	私がハウステンボスで見たことがあり、また見たいと思い子供と2人で見に来ましたが、私も子供も勉強になりました。楽しめました。
4,11	女	○		○			4歳の娘は、賞状をもらったような気持ちになっていたようで、家族に見せてまわっておりました。11歳の娘はエッシャー展そのものがおもしろかったらしく、エッシャーの絵について話しておりました。また、だまし絵を見ると「エッシャーのようだ」とか、エッシャーさんに親しみを感じているようでした。	ただ絵を見るだけでなく、テーマを与えられると、作品を注意深くみるきっかけになるということに気づきました。よい企画をしていただきありがとうございました。
7	女	○	○	○		指令書のことを電話で色々と報告していた。	祖母に今回のエッシャー展の絵の話や指令書の内容、自分と担当の方とのやりとり等、細かく説明していました。作品集を買って帰ったのですが、何度もじっくり見返したり、学校の絵日記にも絵をまねて描いてみたりしていた様です。	普段、自分の意見等、人に伝えるのがとても苦手な子供なので、今回の企画はちょっと大変かな･･･と心配していたのですが、担当の方にも上手に誘導していただいたおかげで自分なりの言葉で思った事を伝えられたようです。その時にほめられた事がとても自信になったらしく、祖母への報告もいつもより細かく、色々と思った事や絵の説明もしていました。良い経験をさせていただいて本当にありがとうございました。
8	男	○	○	○	○		指令書を渡された事により、より詳しく１つ１つの絵を見ようという心がまえが見られ、指令書に絵を見た印象や感じた事をメモして帰ったので、家でもずっと見返していました。「爬虫類」が特に好きで、期間中２回、美術館に見に参りました。「昼と夜」は自分でも本を買ったので、それを見ながら一生懸命ノートに写していました。またこういう子供向けプログラムがありましたらぜひとも参加させていただきたいです。親子で夏休みのとても良い記念になりました。ありがとうございました。	エッシャー展は、絵の展示だけにとどまらず、箱の中をのぞくと△がつながって見えたりするオブジェやハウステンボスのミュージアムショップも来ていたので、見終わった後でもとても楽しかったです。お金を入れても消える貯金箱は息子の宝物です。あと、その時に絵ハガキを買い忘れていたので、プレゼントして頂きとても喜んでいます。ありがとうございました。
67	男					特に話をしていません。	毎日書道展を子供（36歳）と見に行った時、エッシャ展を見に行こうということになり、小生と子供、孫（小4年）で見に行きました。見聞を広める事の大切さを感じています。アンケートを提出するほどのものがありません。	
9	女	○	○	○	○	外のしかけをのぞいた時のこと、ピアニストの演奏のこと、貯金箱を買ったこと	ハンコのM，C，Eがエッシャーさんの名前の頭文字になっていることを発見して、ボランティアの方と話が盛り上がったことを指令書を見ながら祖父祖母に得意気に話していました。偶然近所のよく知っている方がボランティアをされていて、その方を見つけて3つの指令をこなしてとても楽しそうでした。￥1900のコインが小さくなる貯金箱を記念に購入しましたが、どこへ行くにももっていき、周りの友人や知人に見せて不思議さを共有する場面がよく見かけられました。美術館の展示の方法、順路について本人は分かりにくかったようです。ひとつひとつの作品にすごい人だかりで、「えっ」マークを探すのに苦労しました。でも面白い企画だと思いました。	親も指令書をいただき、じっくり鑑賞しながら大いに楽しめました。智内兄助?!だったか前回の展示も見に行きました。前半も後半も。子供には難しいテーマの作品ばかりでしたが、熱心に見るので子どもは感受性が豊かと思います。次のロシア展もとてもとても楽しみにしています。エッシャー展のような子ども向けの企画があればあまり興味のない子も芸術を身近に感じることができるキッカケになるかもしれませんね。ハウステンボスからの作品があることを知り、行ってみたいと子どもがいいます。学習が発展していく様子がうれしいです。ありがとうございました。
40	女				○		めいにパンフレットを見せてよかったことを説明した。	「たんけん!はっけん!エッシャー!!」はスタッフの人がやさしく話をして子供たちにはいい思い出になったと思います。ただエッシャーは少し小さい子供には難しいかも。

参加者		①来館後の行動					②行動の内容	③意見・感想
年齢	性別	ア．指令書読む	イ．スタッフの話	ウ．エッシャー展や作品の話	エ．美術館の話	オ．その他		
2，6	女	○		○			トカゲをが本から出て、また戻る・・・の絵が入ったようで、当日、一緒に行けなかった父親に指令書を見せながら話をしていました。	新聞広告を見て、美術館に行くことになりました。子供もとても楽しみに（特に「滝」と「ぐるぐる階段」・・・と勝手によんでいますが・・・（汗））していました。最初の方の展示が、子供（小1）には難しかったらしく、人が多かったのもあり、お疲れぎみでした。私はとても楽しく見させていただき、感動!の連続でした。絵ハガキありがとうございます。さっそく額に入れて飾らせていただきます。
7，11	女			○	○		ウ＝エッシャーの絵によく描かれているぐるぐるとまわる所について話してくれました。（いつまでも終わらない） エ＝美術館は昔からあるの？いつもエッシャーの絵が展示してあるの？	子供達が絵を見て感じたことを話せる場があってよかったと思います。また話を聞いてくださった方がエッシャーの絵にはエッシャーの好きなものが描かれています等と説明もして下さってとても参考になりました。
?	?	○	○	○			修了証をもらったのがうれしかったようで、祖父母に見せながら、エッシャー展で見た絵の話をしていました。また、ハンコを押して下さった方に教えてもらったことを作品録を指さしながら話してくれました。家には以前ハウステンボスに旅行に行った時に買って帰ったエッシャーの複製画があるので、美術館から帰ったらすぐにその絵のところへ行って、しばらくながめていました。	絵を見て思ったことをその場で文章にするのは、子供にとってなかなか大変だけど、今回のように話すだけならば、小さな子供でもできるので、とてもよい企画であったと思います。子供が係の方に話すのを聞いていて、やはり子供の発想力ってすごいなと思いました。（自分の子ではなく、他の子供達と話しているのを聴いてです）
12	女			○			私は父親ですが、久しぶりに末娘と2人で美術館に参りました。帰宅してから母親にエッシャーの作品のことを話していたようです。3人兄弟の末っ子でおとなしい性格の子ですが、美術館で係の方に話している姿を見て、彼女なりの成長を実感することができました。普段あまり子供と出かけることがない私にとってとても有意義でうれしい一日でした（③の答えになってしまいました）	
5，8	男			○	○	購入したジグゾーパズルを開けた。	8歳の息子は「絵なんだけど立体的な感じがした」、5歳の息子は「不思議だった」という感想。購入したパズルは、細かいピースのものなので親子一緒に長い時間をかけて楽しめそうです。美術館は子どもたちには初めてだったけど、にぎわっていて、緊張することなく鑑賞できた。冷房がききすぎていて寒かった。	家族そろって、初めて美術館を訪れることができました。子供連れにはありがたい企画でした。指令書がもらえる休日にいったので、子どもたちにもなんとかひととおり鑑賞できましたが、下の5歳の子などは、1900年という制作年を探しながら、絵を見ていきました。他にどんな生き物が多く描かれていた、とか何色が多く使われていたか？など指令があったら、幼い子にはわかりやすかったかもと思いました。
7	女		○				話しかけてもらってうれしかったようです。絵をみても理解できてなく、説明してもらってわかった、という感じでした。私もです。	「えっ」の文字をさがして、ダラダラみるのではなくよかったです。いろんな種類のポストカードがあれば良かったと思う。自由研究にしようとかと思ったが、まだ少し早かったみたいです。
7	女			○	○		不思議な絵がたくさんあったこと。中でも「上昇と下降」の絵が良かったと言っていました。	たんけん！はっけん！エッシャーに参加して、自分が思ったこと、考えたことを伝えることができて、良い体験ができたと思います。
7	男			○			面白い絵や変わった絵があったといっていました。特に虫の絵が気になったようでした。だまし絵はわかりにくかったようです。	やはり小学2年生には少しむずかしい絵が多く、だまし絵の意味もよくわからなくて途中であきた感じがあったのですが、いいタイミングで絵さがしがはじまり、そのあとも絵を見てまわることができたようです。おかげで親もゆっくり見れました。
12	女			○	○		エッシャーのまどわされる作品がすごかったなどの話をした。	はじめてエッシャーのような絵をみました。すごいと思いました。また見たいです。
9	男	○		○			帰宅後すぐに祖父母に指令書を見せて、こんなことをしたよ・・・印をもらって・・・と色々と話していました。また、エッシャーの作品の不思議さについて、家族でも話をしました。	自分の思ったこと、考えたことを人に話すことはむずかしいですし、今そういう機会も少なくなって来ていると思います。今回エッシャー展で子供が指令書に基づいてスタッフの方にお話して自分の言葉で思ったことを話せたことは、とても良かったです。修了証をいただいたことも自分で達成した満足感があったようです。どうも有難うございました。
12	女			○			エッシャーの作品のおもしろさや、不思議なことを話した。エッシャー展に行った友達と一番気になった絵について話した。周りにエッシャーの作品みたいに不思議なものはないかと探した。	（小学生だけど、自分で感想が書きたくて自分で書きました。）エッシャーの作品は本当に素晴らしいと思う。これからもエッシャー展を続けてほしい。おもしろい絵をまたかざってほしい。また時間があればぜひ行きたい。しんどいかもしれないけど、お仕事がんばって下さい。上昇と下降がおもしろかった。スマイル！
12	女			○	○		エッシャー展のすばらしい作品の内容を話した。美術館の冷房がききすぎて寒かった。（※本人記入）	
9	男			○			「おもしろかったねー。なんであんな不思議な絵ができるんやろか？どこからつくっとるんやろか？」と言っていました。	ただ見ていくだけでなく見た作品を考えたり、言葉にしていくことができてより楽しむことができたと思います。なかなかこういった機会がないのでよかったです。ありがとうございました。
9	男					○	夏休みの感想をまとめる時に、こうだったああだったねと話しかけると、ガチャポンであった紙に「エッシャーさん」を見つけて話をしてくれました。夏休みと重なったイベントで、いろいろと振り返ることができました。	同級生と行ったので、絵を見ながらたくさん話をすることができて、楽しそうでした。その上にこのイベントがあったので、「美術館の中は静かに！」と親はしかる必要がなく、こちらもしゃべりながら、じっくり絵を見ることができました。
8	女			○			エッシャーの精密な描き方にとても興味を持ったみたいです。空白をうまく利用して描かれた絵なども感動していました。	
7	女			○			平面と立体が見える、は虫類の絵がとてもよかったです小学生が見るにはむずかしかったようです。	エッシャーはあたまのいい人だと思います（子ども記入）
10	女	○				まねをして絵を描いていた。	一緒にいかなかった父に指令書を見せていた。自分が最も気になっていた絵をまねして描いて「エッシャーのと同じに見える？」と聞いていた。	美術館に足を運んだのは子どもたちは初めてでした。最初に見たのがエッシャー展でよかったと思います。
?	?			○	○		美術作品の見方は親では説明しにくいものです。学芸員の方が子供たちに手ほどきをして頂いた事はとても良かったと思いました。どのようにしたらエッシャーのような絵が書けるようになるのか問いかけてきて、家族で話し合うこともしました。これからも子供たちが楽しめるような美術館であってほしいと思います。美術館の「東山画伯の青い波の絵」がとても印象深く心に残ったようでした。	
13	女	○		○	○		ア＝友達が興味を持ったので教えてあげた。 ウ＝　　〃 エ＝　　〃	おもしろかったです。（子ども記入）学校の宿題になっていたこともあり足を運びました。Tシャツを着た方々が元気いっぱい親切に接してくださり、ありがたかったです。子どもは絵を描くのが大好きです。日々忙しくなかなか描いたり、美術館へいたっりできませんが、夏休みにはこのように子どもも楽しめる作品を展示していただけると嬉しいです。
9	女	○		○			みつけた内容を言葉にして人に説明する人に説明する事が大変なようでした。エッシャーは以前から興味を持っており、楽しそうでした。	指令書が、もっとなぞときのようなものだと思っていました。が、このように子どもも参加できる企画は大変はいりやすくよかったです。いただいた絵葉書を見て、また思い出し、いろいろ話がはずみました。返信が遅くなり申し訳ありませんでした。
11	男			○			「滝」の絵が一番気に入ったようで、自分用にハガキを買っていました。帰ってからも、家にあるだまし絵の絵本「目だまし手品」（福音館書店）を見たり、とても面白く感じたようでした。	正解があるわけではなく、一人一人の感じ方を係りの方がきちんとききとってくれて、話しやすかったようです。ありがとうございました。ハガキもとても喜んでおります。
6	男				○		穴からのぞくと実際に見たものと違う状態の作品に変わっていた事	年齢が低いので少し難しかったようです。小さい子供たちには違う探検等があればよかったです。

参加者		①来館後の行動					②行動の内容	③意見・感想
年齢	性別	ア．指令書読む	イ．スタッフの話	ウ．エッシャー展や作品の話	エ．美術館の話	オ．その他		
15	女			○			すごくおもしろく、楽しかったと母や祖母に伝えた。	いろいろと話がきけて良くわかった。自分たちだけではわかりきれないことも知れて面白かったです。でもゆっくりと自分だけで鑑賞したい部分もありました。
7	女	○		○	○		帰宅後、父親や祖父母に指令書を見せたり、エッシャーの作品を説明していました。「すっごく不思議、おもしろかった。だまされた～」など興奮気味に話していました。あと美術館は寒かったと言ってました。	説明が詳しくて、小学生に分かるように説明してあげることができました。模型がとてもよかったです。
12	女		○				感想を言ったときに、エッシャーはどのようなものを中心にどのような気持ちで絵を描いていたのかを教えてくれた人の話。いいレポート（学校の宿題）ができるようにアドバイスをしてくれた。（子ども記入）	とてもおもしろかったので、他のエッシャーの絵もたくさん見てみたいので、次もこのような企画をしてくれるとうれしいです。浮世絵も興味があります。浮世絵のような日本の絵の展覧会のようなものも開いてくだされば、うれしいです。（子ども記入）
11	女	○		○			指令書を読みながら、印象に残った作品やお気に入りの作品などについて話しをしました。ポストカード（今回お送りいただいた）も見ながら、再度子供と話をしてコミュニケーションが深まりました。	・ただ作品を見ているだけではわからないこと。気づかないことをガイドの方のおかげで知ることができ、作品のすばらしさや面白さが倍増しました。 ・親子で楽しみながら作品を見ることができて大変良い思い出ができました。 ・美術館では静かに作品を見るものというイメージを壊し、新しいあり方を提案されていてとてもすばらしいと思います。 ・今後もぜひこのような企画を続けていただきたいし、ガイドの方たちとのふれあいも楽しみに、また訪れたいと思います。
7	男			○	○		・自分が選んだ絵の他にもすごい絵がたくさんあったということ ・常設展にも大きな作品がたくさんあったこと。	
8	男			○			エッシャーの本を購入して、この絵はここが不思議だよと話してくれました。	エッシャーの絵にとても興味をしめして、美術館で真剣に絵を見て父親と絵について話したり、係りの人に話を聞いてもらったり、話をして頂いてよかったと思います。また、みんなで美術館に行きたいと思います。
8	男	○		○			その日の夕方～親せき宅へ寄って指令書を見せていた。印象に残っていた絵の話や立体もけいについても思い出して話をしていた。	外の立体もけいで再現したのが楽しかった。中は参加、体験した、という満足感もあってよかった。かたくるしくない美術展には大賛成です。小さいうちにより多くの芸術にふれさせて、感性のすそ野を広げてやりたい、という親のささやかな願い・・・。
?	?	○	○	○	○ ※常設展の中で子供は東山カイイの絵が一番好きだったと言います。		美術館にはあまり行かない方ですが、今回のエッシャー展は親子供、大変盛りあがりました。作品の内容の事や家でも自分で描いてみたりもしました。エッシャー展の新聞コピーをお願いしたのですが、お忙しいのにとても親切に対応して頂きありがとうございました。四国の方は皆さんとても優しいです。	とても良い内容でした。子供の見方が真剣でした。
10	女			○	○		ウ＝ずっと気になっていた上っていくかいだんのひみつのことをみんなで話しました（子）面白い形をしているをしているので、さすが美術館だと思った。（子）	私自身は人が多くてゆっくり見れませんでした。子ども達は自分が見たい作品を選んで見ていたので、帰ってからもその絵についてどこか変なのか話していました。
14	女			○				エッシャーの絵は見ていて不思議な気分のさせてくれるものばかりで、とても気に入りました。もう1度見たいと思いました。
13	男			○	○		エッシャーについて美術館が広かった事（子ども記入）	とてもおもしろかったので、またやってほしいです。（子ども記入）
7	男	○		○	○		ア＝ママに見せた　ウ＝ママ に作品の話をした　エ＝弟に美術 館へ行った話をした。	子どもから参加したいと言い出した。鑑賞時間も短く感想すらあるのか疑問だったが、それなりにお話をしたのでびっくりした。語彙が豊富ではなく、「おもしろかった」「よかった」程度の感想かとも思っていたが、絵の説明、彼なりの感想が聞けた。残念ながら「これは」というフレーズはなかったけれど・・・。美術展には連れて行く方だと思うが、彼がどう感じたのか分からなかったが、それなりに感想があることがわかった。いい経験をさせていただいた。
12	女	○		○	○			
4	女	○		○		ガチャガチャのこと	絵も4歳ながらに「ぐるぐるまきの絵がたくさんあった」とちゃんと観ていたようです。「ハンコを押してもらった」とごきげんでした。	
8	女	○	○	○			今まであれこれ連れて行っているつもりですが今回のが一番おもしろく楽しかったようです。（イベントごとは初めてでした）親からのレクチャーではなく美術館の中の方とお話ができたことはちがった視点を素直に受け入れることもでき、自分の思いも伝えることができとてもいい体験になったと思います。	大人にも子どもにももっと企画展が身近になるようないろいろな試みは大切だと思いました。ハウステンボスよりもとても良かったです。次回ロシア展もエジプト展も楽しみにしていますし、子どもも一緒に楽しめたらと思います。
13	女	○	○	○			エッシャーの写真を見せながら、おばあちゃんに、自分の気が付いたところを話してあげました。写真はパンフレットを見せてあげました。指令書は、自分からこんなことを言ったなあと思い出しながら見ました。	美術館の中の順路がわかりにくかったです。それに人が多くて「えっ」の人が子どもたちに、絵の前に立たせていたので、見にくかったです。出口もまだ全部見てないのに間違えて出ようとしてしまいました。でも「えっ」の人が、声をかけてくれたので、しべりやすかったです。楽しかったです。
12	男			○	○	○	作品集を繰り返し見ながら気に入った作品を兄弟に説明している。	子どもの興味関心を高めるので同じ様な企画を進めて欲しい。
9	男	○	○	○	○	作文を書いた	ア＝指令書は美術館では内容がわかっているようなわからないような流れにまかせて行動していた所もありましたが、帰宅してじっくりゆっくり読み色々思い返しておりました。　オ＝これは本人から言い出したことではありませんが、夏休みの宿題がありましたので、こちらからやってみる？とうながしたところ、トライしておりました。その為、指令書があり、参考資料となり助かりましたし、思い返してみる良いチャンスにもなりました。	今までも何度か美術館には行きましたが、このようなイベントは初めてで、親子で楽しめました。ただ、作品がたくさんありまして、その中からいくつかを見比べるというのが難しかったのと「えっ」と書いてある絵だけを見て終らそうともしていたり、美術館内をうろうろ・・・で妹が疲れ気味でした。でも、これも何度も経験していけば、なれてはくると思います！！（別の場所でゆっくり見比べる事ができれば他の大人の方にも迷惑をおかけしなかったのかなとも思いました）
12	男			○			国語の授業でくれた絵が出たよと友達に言った。（子ども記入）	エッシャーさんは人をおどろかす絵を描くことが好きなことがわかりました。（子ども記入）

資料１１（エッシャー展をみて帰宅後描かれた男の子の作品１５点。ちなみに②番以降の作品は図録をみながら描かれたものではなく、全て男の子の記憶をもとに描かれたものである。　※解説は保護者によるもの）

①　エッシャー展のガチャガチャで出てきたお魚を写生

②エッシャー展をみて、球体を持つ絵

③　エッシャー展、上昇と下降のような絵

④２００７．８　エッシャー展

⑤　２００７．８

⑥白と黒のはばたく鳥の絵のようなのをかきたかったんだと思います。

⑦２００７．８　上下どちらからみてもおさいふ

⑧　エッシャー展をみて

⑨

⑩

⑪

⑫　２００７．８エッシャー
鳥がたくさんかかれていた絵があって、「うわ～すごいいっぱい鳥がおるね～」と言ってみていました。

⑬

⑭　２００７．８

⑮２００７．８　へびのふん水、男の人とのこと